

アメリカ留学体験記

善光寺海外留学僧 島 崎 義 孝

はじめに

カンゼオン・サンガ（以下、KSと略す）はアメリカの最東北端、メイン（Maine）州バー・ハーバー（Bar Harbor）に本拠を持つ。旧都ポストンからは一時間のフライトで、車では五、六時間。カナダの有名な観光地ノヴァ・スコシア（Nova Scotia）までアカディアラインで一晩の船旅である。このあたり一帯は東部の避暑地であって、閑散期の人口はたとえばバー・

ハーバーで四千人をいくらか越すにすぎないが、夏場には数十倍にもふくれあがり、膨張の程度はカリフォルニアのヨセミティ国立公園のそれに匹敵するのだそうぞ。

一年のうち半分は暖炉に火が入っているような気候で、都市がもつ活気はないが、雄大な海と山の醍醐味を満喫できるアメリカで最も古い州のひとつである。厳冬期には零下二十度以上にも冷え込み、雪と風に封じ込まれて街は死んだように静かになるという。

レドゲロン (Ledgelawin) 通りに面するK S
の本部、カンゼオン・ゼン・センター(以下、
K Z Cと略す)に筆者は十月上旬からおよそ二
ヶ月間滞在した。小文ではK Z Cの概略と、そ
れに先だつ筆者のおよそ一ヶ月間にわたるK
S、ヨーロッパ撰心の様子などを記してみたい。

カンゼオン・ゼン・センターの

活動・日常生活

K Z Cではこの十月十五日、前角老師(Z C
L A主管)の高弟のひとりであるデニス・玄法・
メルツエル師が日本曹洞宗公認の佛隆山法真寺
住職として晋山式を挙行し日本式に言うならZ
C L A(佛真寺)の法類寺院となった。式典に
は筆者にも顔なじみの人が大勢列席され、ヨー
ロッパからも数人のK Sメンバ―がかけつけ
た。事情で来れぬ人達は西ドイツのどこかで同
じ刻限に打坐の機会を持ったはずである。晋山

式など日本でもそうたびたび見られるものでも
ないが、アメリカではなおさらのこと、何かの
役にあたったほとんどのは右往左往の連続
で、差配にあたられた前角老師の苦勞もひと通
りではなかったと思われる。それでも式がすん
で近くのレストランでの祝宴にもなると皆さす
がにくつろいだ様子でまことに和かな雰圍氣で
あった。玄法師のあいさつの最後の「サンキユ
ー・エブリボディ」ということばはなんでもな
いごくふつうのしめくりだが、レストランで
の食事の調理や給仕あるいは記念品の包装まで
ほとんど一切がK Z Cの人達の自発的な意志で
行われていることを知っている者には結局そう
言うしかないのだと納得されたはずである。グ
リーンガルチ(サンフランシスコ・ゼン・セン
ターの支部)から、袈裟の縫製指導に来ておら
れた春浦尼が、新しいセンターは活気があって
いいですねえと顔をほころばせておられたが、

アメリカではいわば老舗にあたるセンターの人
ならではの余裕だろう。春浦尼とは筆者は二度
目の対面で、五月中旬グリーンガルチに行った
さいには随分お世話していただいた。活気があ
る、とは言われたのもそのはずで、晋山式に先
だつ二日前、準備作業の忙しいさなかにもかか
わらず六人（男女各三人）が得度式を行ったか
らだ。そのうちわけはイギリス人三名、アメリ
カ人、フランス人、オランダ人各一名という具
合でKSの性格をよく物語っている。KSでは
得度、受戒に先だつて本人が袈裟や絡子をした
てることになっているが、袈裟の縫製指導とは
このことである。日本からとりよせれば高くつ
くということもあるが、彼らはこれも修行のひ
とつと考えている。作務や坐禅の時間もさいて
袈裟や絡子のしたてにせいだしていた。この六
人以外にも筆者の滞在中に、いずれも女性だが
ポーランド人が得度、オランダ、イギリス人が



バー・ハーバーの風景

それぞれ一人ずつ受戒している。KZCはその「観世音」という名があるせい、女性の数が多く、少なくともメンバーの六割強は女性によって占められていると思う。

アメリカではこれまでZCLAでの得度を何件かみたが、いずれも男性で、もとより式前に剃髪していた。ところがKZCで見たそれはかなり様子がちがう。七人のなかで剃髪したのは男性二人のみで、あとはヘスポーツ刈り、女性のばあいはいわゆるヘシヨート・カット、短くても二インチ（どこからそんな規準が出てくるのか筆者は知らない）で、見ている方としては余り共感がわいてこない。衣とか袈裟を坐禅のときのフアッションか何かと思っているのだから。もつとも日本の坊さん連中のなかでも剃髪染衣で始終する人はあまりいないので、われわれとしてもあまりえらそうなことは言えないのだが。

いやがられるだろうとは予想しつつ「得度」をすませた人たちになぜ剃髪しないのだと聞いてみたら、はつきりと答えてくれた人はひとりもいなかった。自分じしんに釈然としないものがあるのだろう。メンバーのなかにも、自分は将来、時が来れば授戒してダルマ・ネーム（法名）はほしいけれど、事情はともあれ小さな子供を国に放っておいて坐禅だ、得度だと言ってもそれではまったく意味がないと批判的な人もいる。しごくもつともな意見だと思う。日本ではハズバンドが日曜・祭日も接待ゴルフに出かけてしまつて無聊をかこつ妻君たちのことを「ゴルフウイドウ」というそうだが、また一方では「坐禅ウイドアー」と言つてもいい放てきされた亭主や子供たちもいるわけだ。

剃髪についてはいろいろと問題があるだろう。それが女性のばあい問題は深刻だ。職場であれ家庭であれ周囲の人々に強い疑惑を与える

らしい。ZCLAのマウテンセンターでこの夏一緒だったイギリス人の若い女性は得度したわけではないが、剃髪するとどんなものかしらんというところで興味半分に実験的にやってみたそうだ。その経験によると家庭の者は驚き、近所の人々には不信な目で見られ、友人知人にはか



らかわれ、街ではしばしば人がふり向いたりニタニタ笑われたり、とにかく髪の毛がないというだけで神経のやすまる間がなかった。人がいつも見ているという意識が強くはたらいたからだ。何度もかつらを買おうと思っただけで、じつと髪の毛の生えるのを待った。くじけずにがんばり通した自分はえらかった、と冗談まじりに笑いながら話してくれたことがある。しかし有髪の毛のままの得度などナンセンスで、一度は剃髪してからでないとだめだ、ただ自分は二度とする気はないと言っていた。

ところでKZCでは現在二十人足らずの人達がレジデントとして生活している。大半はヨーロッパからの人々であり、長期の人でも一年、たいていは外国人であることからヴィザの問題などもあって二・三ヶ月の滞在でそれぞれの国に帰っていく。往復の旅費や滞在費（長期のばあい月額四〇〇ドル、二・三ヶ月の短期のばあ



ポーランドの禅堂

い五〇〇ドル)もとりわけ外国人のばあいにはバカにならない。アメリカ人の居住プラクティシヨナーも数人いるが、おおかたのメンバーはセンターの近くに住んでおり、各人の都合で朝夕の坐禅に通うというぐあいだ。いつも思うことだが、こういうところにやって来て何ヶ月も生活できるというのはどんな人達なのだろうか。今いる人たちの職種は園芸家、元精神療法医、画家、元学校教師、大工、図書館員あるいは学生、一般家庭の主婦・子女などである。それまでの仕事をやめて住み込んでいる人にも「失業」という悲壮感はなく、飽くまでも自身の選択である。とくにアメリカ人のばあいは楽観的で、蓄えがなくなったら何か仕事を捜し、いくらか溜ったらまたセンターに戻ってくるつもりだという。若い世代ではなく、四十代・五十代の独身者がこうなのであって、筆者などはアメリカは実に社会的紐帯のゆるい、物質的には恵まれ

た国なのだと思う。日本では今日でも終身雇用がひとつの原則のようになっていて、有休休暇でさえその半分は返上して働くという具合だから、二・三ヶ月も勤め先や家庭を空ければたゞごとではすまないだろう。基本的に社会のしくみじたいがちがうのだろうが、それ以上に個人意識というか、個人の生き方についての意識に何かしら大きな隔たりがあるようにみえる。どちらかというかわれわれ日本人のばあいは生き方の技術、たとえば学歴も含めて資格の獲得とか、経済面での安定などについては実に器用で熱心だが、自分の生き方そのものに対する問いかけといったことには関心がうすいのであるまいか。もつとはつきり言うと、商売繁盛、家内安全・無病息災などの、より可視的な面での要求が、日本人のいわゆる宗教意識のひとつの大きな核になっているように思えてくる。

それはそれとして、例によってKZCの日常

スケジュールを見てみよう。

五時	起床
五時三〇分	坐禅のちサーヴィス(朝課)
八時	朝食
九時〜一二時四五分	作務
一時	昼食
三時三〇分	坐禅のちサーヴィス(晩課)
六時	夕食
七時三〇分〜九時二〇分	坐禅
一〇時	消燈

摂心のときには起床が三〇分はやくなり、作務を一〇時まで二時間で終える。くりあがった時間にダルマ・トーク(法話)がある。通常、土曜日の午後と日曜日は終日自由時間になって

いる。見られる通り一日だいたい六〜七時間を
坐禅に費しているが、午後のそれは随坐である。
たいていの人はこの時間も坐るが、メンバーの
なかにはパートタイムで働きに出ている人もお
り、日中は少し人がまばらになることもある。
これまで筆者が滞在してきたセンターのなかで
はどちらかといえばニューヨーク州のマウン
ト・トレンパーに似ているが、ヘモナストリーと
いう雰囲気はない。たとえば毎朝九時におこな
われる（作務ミーティング）では、各人が自分
きょう何の仕事をしますという具合だ。それで
いて別に支障をきたすことはないようだ。全体
にすべてがゆるやかで、アボットの人柄にもよ
るのだが、家族が一緒に生活しているためどう
してもそうなるのだろう。ただ坐禅中に階上で
小さな子供が物音をたてていることもしばしば
あり、せっかく遠くからはるばるやって来てい
る人たちには少々気の毒に思うことがある。



オランダでの接心

朝夕には代参がある。摂心中は坐りに来る人の数も三〇人ぐらいに増えるためか一日にだいたい三度にわたる。これはいわゆる事実上の参禅だが、玄法師が老師に代わってプラクティシヨナーを個別に指導する。またKZCにはヘグループ代参」というのがあるが、毎週火曜日の朝と夜にそれぞれ一炷の坐禅の後おこなわれている。呼び名や形式はちがうが、ZCLAのへ小参に似ている。ZCLAでは問者がひとりずつ立ち、形式にのっとりて老師に質問したり自分の所感を述べたりというやり方だが、KZCではひとつのテーマについて色々な意見をめぐらすという形態だ。筆者の知った範囲でいうとこれまでへ八正道へ修行へ師弟関係などがテーマとして扱われ、ばあいによつてはプラクティシヨナーに話題を提示させる。しかし様子を見ているとほとんどの場合、けつきよくへセンセイである玄法師のモノローグになつてしまい、

あまり彼等じしんの独創的な意見や発想が出ていようには思えない。選ばれたテーマにあまり関心がないせいだろうか。こういう機会には外から集まってくるメンバーもけっこういる。

一方、KZCでは地域にとけこむ試みも行っている。これはまだ始められたばかりで、今まで四回開かれたにすぎない。へパブリック・トークと称しているが、専門用語をなるべく使わずに、ストレス解消とか精神安定のためのひとつの方法として坐禅の効用を説明したり、あるいはばあいによつてはKZCの活動の説明そのものも求めに応じて行っている。聴講に訪れる外部からの人の数は十人前後で、毎回少しずつ顔ぶれがちがうようだ。近くのスーパーマーケットに小さなパンフレットを掲示したり、メンバーがなにかの商売をしている場合は店内にもへパブリック・トークの案内を置くというように地道な活動をしている、このときは仏像



を撤去し、センターの人々も衣や黒のハビットは着ず平服のままである。もとより木魚とか磬子など、とくに仏教色の濃い鳴物類は使わないし、ろうそく・線香も使わない。ユキユメニカルⅡ超宗派・超教派という表現をしているが、仏教や坐禅が日本におけるほど親しまれていない、とりわけバー・ハーバーのようなアメリカの小さな町では必要な心くばりなのだろう。またヘバーン・レイズイング (barn raising) といふコミュニケーション・ワークにも積極的に参加し

ている。これはもともとは初期の移民時代の入植者の互恵活動で、家屋・納屋などをちまわりで共同して建てたところからこう呼ばれるらしい。アメリカの地方部では伝統的な慣習である。今日では学校とか、集会所のような施設が対象で、われわれKZCの居住者は総出で近くにあり小学校の運動遊技場の建築補助に精出した。

誕生の経緯

アメリカの仏教グループはごく一部を除けば、大半は一代も経ていない新しいものばかりだ。KSはそのなかでも最も新しいグループのひとつだと思うが、ここではKSの設立にいたるまでの経緯を事実上の創立者である玄法師のライフヒストリーとからませて追ってみた。それはある意味でアメリカ（あるいはヨーロッパ）における仏教グループ成立のひとつの典型を示していると言っていいたいだろう。

玄法師は一九四四年、ニューヨーク市ブルックリン(Brooklyn)に生まれた。育ったのはロサンゼルスである。大学時代には水球の選手だった。まさにカウンター・カルチャー世代のただなかにあつたといえる。チームがオリンピックに出るまえ六六年には水泳をやめ、長髪・髯ぼうぼうのヒッピースタイルで、バックパックひとつ背負って方々をうろつきまわつたという。二二才のとき結婚したこともあるが数年を経ずして別れ、しだいに宗教書にも親しむようになってきた。しかしまだそのころはいわゆる世俗的な関心が強く、自分の生き方に迷っていた。だが鈴木大拙やアラン・ワット(Alan Watts)に耽溺するようになって、我流で坐禅を始めた。誰か師に就こうという気持はなく山の小さなキャビンにこもって一日七、八時間坐っていたこともある。自分の師は自分であり、他に習う必要はないと考えていた。その頃をふりかえると実に

傲慢だつたと思う。学校の教師をしたこともあるが、それもやめて砂漠地で生活しながら坐禅を続けているうちここで大きな精神的変革を経験した。決して深いものではなかったが、この体験を他の人にも分ち与える必要があると思つた。一九七一年のことだつたという。そして翌年五月、友人に伴われてZCLAの摂心に行つた。ここで玄法師は初めて前角センチに会うことになつた。当時のZCLAは前回のレポートで述べたように設立後数年を経ただけでメンバー数も七〇人前後にすぎなかった。もとより規模も小さく、現在の禅堂とサンガハウスだけが施設のすべてだつた。前角老師はすでに安谷白雲老師から印可を受けていたが、玄法師が会つたときはまだ「ヘンセイ」と呼ばれていたのだそうだ。そして間もなくZCLA滞在中の芋坂光能老漢からも印可を得て「老師」になつた。前角老師はこのとき四一・二才、自



カンゼオン・ゼン・センターの人々と

信満々でZCLAの充実に心血を注いでおられたのだろう、それがまだ若いデニス青年にはへ冷淡で、虎のような人間に見えたらしい。苧坂老漢はそれに先だつ数年前から年に二度の割合でZCLAに来て摂心の指導をしておられた。一度に長いときには三ヶ月以上の滞在もあったそうだが、たいいてい七日摂心が指導の対象であった。当時およそ八〇才、最後のアメリカ訪問で、デニス青年は老漢と二度の摂心をもったが、何度か参禅にいくうち、堅固ななかにも人を包み込むような暖かさを感じたというのが玄法師の述懐である。青年デニスの目には光龍老漢のほうが好きく映ったようだ。逆に前角老師にはどうしようもない尊大傲岸な若僧に見え、むしろそれを老師は買われたのだろう。同じ年のある摂心のさなかこの両者の間で行われた人になんまりさせるいい話があるのだが、それは筆者がひとり楽しんでおいていまは書かない

でいきたい。

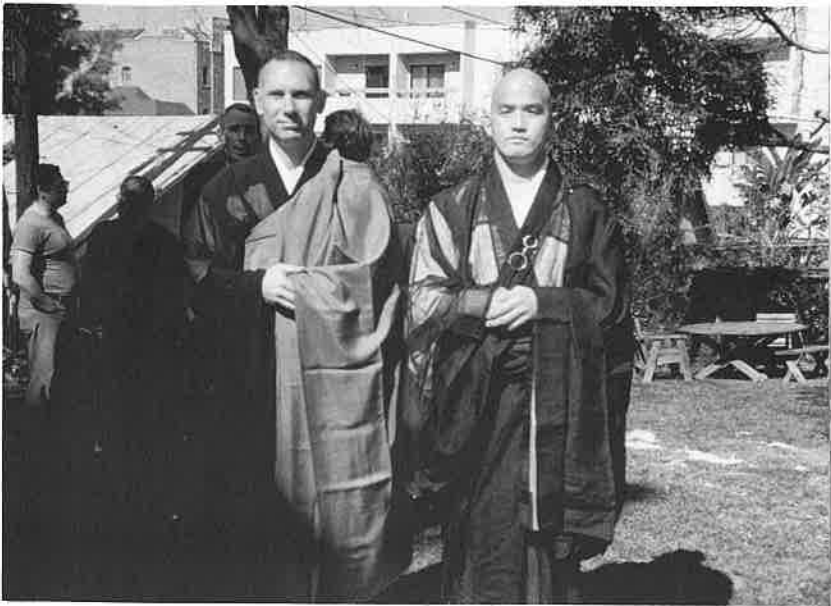
いずれにせよこの年からデニス青年は前角老師を師としてZCLAで坐禅をするようになった。ただこの時はまだ例のヒッピー姿のまま、ガールフレンドとセンターのすじ向いの家に住んだり、ロサンゼルスの北一五〇キロにあるサント・バーバラ(Santa Barbara)のキャビンで生活したりという具合で腰が定まったというわけではなかったらしい。老師はZCLAがもちろん活動の中心で、月に一度二日坐禅指導のためにサント・バーバラに足を運んでいたそうだが、徹玄師(玄法師の法兄。ZCNY主管)の後日談によるとデニス青年の監視の意味もあったらしい。一九七三年十月に得度するが、このときも自分はゼン・モンクになりたいのであって、仏教徒になりたいのではないと突っ張った。しかしけつきよくうまく丸め込まれてしまって受戒、そしてしばらくしてから得度ということになっ

てしまったと玄法師は笑いながら語ってくれた。余談になるがZCLAの記事を書くために資料を調査したさい、比較的初期に得度した少なからぬ人たちがセンターを離れているのに気がついた。こういう人たちと今日も個人的に交流があるのか、また彼等はどこかほかのセンターに入ったのかなと玄法師に尋ねてみた。当時親しかった人々とはもちろん今でもひんぱんではないが交際があるし、去って行った大部分の人も自分で坐禅を続けているばあいが多いのではないか。理由はいろいろあげられるが、特定のセクト宗派あるいはそれに伴う伝統的な宗教儀式にこういう人たちは概してあまり関心がなく、むしろ自分にあうやり方を方々からとり入れて自己流にやっているのではないか、ということだった。へアメリカ流というべきだろうか。アメリカにおけるある種の宗教のあり方を示しているように思えて興味深い。

さて、得度した翌年、七四年にはそれまで続けてきた非常勤の学校教師をやめ、日中は事務所のスタッフとして働き、朝夕は道路向いのアパートから通ったが、そのうちZCLAに移り住むようになった。

七八年はZCLAがはじめて年間を通じてのトレーニングプログラムをつくり、それにしたがってメンバー数も一年間に二倍増したという。筆者がレポート執筆のためZCLAで調べてもらった資料では、設立の当初からほぼ一定のペースで会員数が増え、これは八二年まで続いている。記憶がいかに、もしくは資料の集計の誤りであろうか。いずれにしてもこれに前後する数年間ZCLAの中心的なスタッフのひとりとして働いたわけだ。同じ七八年には他のメンバーの修行を助けるための個人面談を任せ、翌年には公案を終えたという。

ところがひとつの大きな変換期があつて、八



メルツェル玄法師（右は筆者）

四年には多くの人達がZCLAを去った。メンバー数の一貫した著しい増加に対して内容がついていかなかったといえるだろう。筆者は詳しい理由を審かにしないが、どこでもよくあるように人間関係の様々なもつれがあつたと思われる。玄法師じしんもそのひとりだつた。ハワイで僅かの間だが他のグループの人々と接触をもつたこともあるらしい。だが同師のばあいはすでにヘセンセイ資格で、それに先だつ二年前、すなわち八二年にはヨーロッパからZCLAに来ていた人々の招きでオランダ、イギリス、そして少し遅れてポーランドに出むいている。もちろん摂心指導のためである。話によるとごく大雑把にみてそれぞれの国に六〇人前後の人々がいた。ZCLAを出てからは夫人が子供とハワイの親元に仮寓していたことから、ヨーロッパとアメリカの間をしばしば往復したこともある。そのうち家族と一緒にアムステルダムに住

むようになり、住居のフロアを開放して週の三日間は、夕方、人々と坐禅した。同時に右の三ヶ国で一ヶ月に一度の摂心をもつたという。そして八五年にはアムステルダム市内に待望の禅堂を構え、八人が住み込み、摂心のさいには二〇〜三〇人の人が来た。しかし第二子ができ、夫人がアメリカに帰りがつたり、ヴィザの問題があつたためヨーロッパをひきあげることにした。なにより彼じしんヨーロッパの人々の修行態度に不満があつたらしい。センターに住み込んで坐禅しようというのではなく、趣味程度にしか考えていないように見うけられたからだという。そしてまたハワイに住むようになったが、ヨーロッパにも継続して同じような割合で摂心に行つていた。

バー・ハーバーには八四年、現在KSのメンバーになつている人の招きで来ていらい間歇的にワークシヨップや数日間の摂心をもつたこと

がある。ヨーロッパからアメリカに戻って後、国内に適当な禅堂を持ちたいと考えていたが、バー・ハーバーの人達がそれを実現してくれた。地理的にもヨーロッパとアメリカを往来するのに便利であり、冬場はじっくり坐り込めると思ったので家族をひき連れて移り住んだ。八七年、四月のことであるという。KSの強い協力をえて、ワークシヨップを行っていた建物を購入したのはちようど一年前一九八七年の十二月である。この建物はもと修道女院で、地上三階、地下一階、百年ほど前の建造になるという。外側は赤レンガ、新緑の頃には蔦が美しい。内部はいくつもの部屋に分れているが、二階のもとは礼拝所であつたらしい部屋を禅堂にあてている。二十五人も坐ればちよつとした動作のときにも身体が触れてしまうような小さな禅堂だ。三階は玄法師一家の住居である。そして今年八月末、ちようどオランダでの摂心中この建物の

すぐ隣の家が売りに出されるといふニュースが入り、十月上旬には早々とKZCレジデントの引越しが始まった。筆者がいまいるのがその建物で、木造三階建、地下もある。少し老朽化しているのと、一般住宅であるため多くの人が生活するようにはできていないので、修理や改築を要し、今のところは作務の時間をもつぱらそれにあてられている。

ところではじめにKSはアメリカ、ヨーロッパにおける仏教グループ成立のひとつの典型を示していると述べた。仏教は欧米社会においてはキリスト教とは異なり、歴史も浅く人々にあまり知られていないために、はじめから大きな支持をうることはきわめて稀である。したがってたいのばあい最初は摂心などを方々で行なつて、一定数のメンバーを集め、それをしたいに拡大しつつ、一定の建物を活動の中心に据えていくようになる。

(未完)